

Title	日吉臺堅穴住居址發掘報告(概報)
Sub Title	
Author	西岡, 秀雄(Nishioka, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.15, No.3 (1936. 11) ,p.134(498)- 138(502)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19361100-0134">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19361100-0134</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

かゝつた水が溜つてゐて、何となく氣味が悪い。も少し何とかで  
きないものか。夏は随分蚊の多いことであらう。記念とてさし出  
された名簿に署名して辭去す。

蓮臺寺莊に戻り、晝食後解散。

伊木先生、松尾君の二人は天城越を企てられ、湯ヶ野方面に發  
たる。残る十一名は下田に出で、バスを乗換へて東海岸を廻り歸  
途につく。途中、熱川に一泊した連中もあつた。

終りに臨み、當旅行のため、數多御便宜を與へて下さつた方々  
に厚くお禮を申し上げます。(金川太郎)

## 日吉臺堅穴住居址發掘報告(概報)

### 序 言

昭和十一年七月三日より十七日まで三田史學會は間崎万里教授  
等の主唱に基き、日吉臺堅穴住居址の調査を行った。

神奈川縣橋本郡日吉村の本邊豫科敷地は、既に本誌第十一卷第  
一號同第二號及び第十二卷第一號等にも發表せられた如く、先史  
原史各時代の考古學的遺蹟遺物多數を包括した、斯學研究上甚だ  
興味ある多摩川下流右岸の一臺地で、今回發掘した遺蹟は、同じ  
くこの臺地上にあり、豫科校舎より南方の體育會と通ずる道路附  
近に散在したもので、道路開鑿により切斷せられた堅穴十基(第一  
〇一號より第一二〇號まで)の中六基(第一〇一號より第一〇六  
號まで)と、第一〇二號第一〇三號堅穴間で道路に切斷せられた

い堅穴一基(第一二一號)との合計七基である。  
出土した土器は一二の破片を除き全て彌生式で完全な物無く、  
其の發掘破片總數千百拾四個を算し、石器は半磨製石斧一個を出  
土しただけである。

以下其の發掘概要を堅穴番號順に記し、詳細な報告は次の機會  
を俟つ事とする。

### 發掘概要

七月三日午前中は發掘開始に先き立ち、先づ體育會へ通ずる道  
路兩側に斷面を現はした堅穴十基の位置を測量するに費す。そし  
て道路東側の西北部に位置した堅穴を第一〇一號とし、南部に行  
くに従つて順次番號を付し、最後に第一〇二號第一〇三號間の道  
路に切斷せられなかつた堅穴を第一二一號とする。

### 第一〇一號

本堅穴は道路東側に其の斷面(深サ黒土層表下約一米・ローム  
層表下約四十糎、幅約三米)を露出したもので、七月三日午後一  
時から人夫三名を使用して發掘を開始する。約三十分で本堅穴は  
大部分道路開鑿により消失し居り、僅に堅穴東北部分奥行約五十  
糎を殘存せる事を推察し得るに至つたので、都合により此の日は  
發掘を中止する。

翌四日午後二時より三時まで、前日殘し置いた本堅穴の黒土全  
部を除去し、發掘を終了する。其間、土器片六個(第一號より第  
六號まで)及び炭化物(竹あり)等を出した。尙、本堅穴の床部  
には赤き所謂燒土の厚さ平均一糎の層があつた。

## 第一〇二號

本堅穴は第一〇一號堅穴より東南方約百五米の所に在り、道路東側に其断面（深サ黒土層表下約六十糎、ローム層表下約二十七糎、幅約三米三十四糎）を露出したもので、七月三日午後一時半發掘を開始する。黒土除去作業約一時間後、本堅穴東南部で現在地表面下約六十糎の所に、土中の壓力により甚だ原形を破損せるも、内部に小砂利數個を入れた一個の壺形土器（破片第七號より第六三號まで）を發見する。やがて其の直ぐ近くに缺損せる高杯形土器（破片第七〇號より第七八號まで）現れ、尋で堅穴北部に壺形土器の口頸部（第六四號）のみ現る。床上には厚さ平均四糎（最大厚約十三糎）の赤き所謂燒土層あり、この所謂燒土層下には隨所に薄き炭化物層發見され、以上の二層を除去するや、柱穴二個所（第一號—徑十八糎・深サ四糎、第二號—徑十七糎・深サ十五糎）現れ、同時に又道路開鑿により其の半分を缺損せる爐趾（徑約六十五糎・深サ約七糎）現る。午後五時過ぎ本堅穴の發掘を終了する。尙、本堅穴は道路より最大奥行一米五十糎を残して居り、出土土器片は七十二個（第七號より第七八號まで）である。

## 第一〇三號

本堅穴は第一〇二號堅穴から東南二十五米の所に在り、道路東側に其の断面（深サ黒土層表下約七十五糎・ローム層表下約四十五糎、幅約四米四十糎）を露出したもので、七月三日第一〇二號を發掘と同時に午後二時より午後三時まで掛り、堅穴床部近くまで掘り下げ此の日の發掘を終了する。

翌四日午前九時より再び發掘をなし、床部隨所に多數の土器片

（第七九號より第一八六號まで）及び自然石破片一個を出し、午後には柱穴四個所（第一號—徑十二糎・深サ七糎、第二號—徑十糎・深サ四糎、第三號—徑二十二糎・深サ二十六糎、第四號—徑十一糎・深サ四十糎）判明し、午後二時發掘を終了する。尙、本堅穴は道路より最大奥行二米五糎を残して居る。

## 第一〇四號

本堅穴は第一〇三號堅穴より東南約十二米の所にあり、道路東側に断面（深サ黒土層表下約一米・ローム層表下約五十糎、幅約四米）を露出したもので、七月四日午前九時より黒土除去作業を開始し、午後四時半頃一部堅穴床部に達す。其の間何等特記すべき事なく、唯、爐邊に置かれたらしい自然石一個（第一號—徑約十五糎・厚サ約四糎）出土し、やがて爐趾二個所（第一號—最大徑一米二十糎・深サ十糎、第二號—最大徑七十糎・深サ八糎）判然し、同時に第一號爐趾中に彌生式土器特有の鉢形底部（第一八七號）現れ、尋で柱穴二個所（第一號—徑十五糎・深サ三十七糎）、土器片・自然石（第二號）等現れ、午後五時半發掘を一先づ中止する。

翌五日午前七時十五分再び發掘を續行し、終日綿密なる黒土除去作業を行ひ、前日發掘した第二號柱穴は特種の形を有する事明らかとなり、午後四時には土器底部（第三七〇號）を内部に埋藏した穴（第三號）を發見し、やがて本堅穴の東方周邊部明瞭となり、同時に柱穴三個所（第四號—徑十五糎・深サ七十二糎、第五號—徑十五糎・深サ七十糎、第六號—徑十五糎・深サ七十糎）相尋で現れる。午後五時半一先づ發掘を中止する。本堅穴は道路に破

壊消失された部分少く、道路より最大奥行四米四十糎で、第一〇一號・第一〇二號・第一〇三號等と比較し、堅穴の残存面積が廣く、出土土器片も百八十四個(第一八七號より第三七〇號まで)を算した。

翌六日は雨天にて發掘休止。

七日午前七時より堅穴外部に柱穴あらば其の位置を知らんと、堅穴周邊部に沿つて外部へ約一米ばかり、ローム層まで黒土を除去し、柱穴らしきもの二個所(第七號—最大徑一糎・深サ約五十糎、第八號—最大徑九十糎・深サ約五十糎)を發見せるも、竹の根により原形を破壊されて居る事が遺憾である。

第一〇五號

本堅穴は第一〇四號堅穴より直ぐ南約三米に接近して位置し、道路東側に斷面(深サ黒土層表下約一米・ローム層表下約五十糎、幅約五米三十糎)を露出せるもので、五日午前七時より發掘を開始し、堅穴周邊部判明するや、都合により一先づ發掘を中止する。八日午前八時再び發掘を續行し、午前十一時に至り床部に達し、柱穴一個所(徑約五十五糎・深サ七十五糎)現れ、發掘を終了する。

第一〇六號

本堅穴は第一〇五號堅穴より東南約三十二米の所に在り、道路東側に斷面を露出したもので、八日午後一時より發掘を開始し、午後四時まで黒土除去作業を行ひ、土器十數片(第一一〇〇號より第一一一四號まで)を出したが都合により本堅穴の發掘は中止した。

第一一一號

本堅穴は道路東側で丁度第一〇二號堅穴と第一〇三號堅穴との間にあり、全く道路に切斷せられざる而も今回發掘されし堅穴中最大のものである。其の地下に於ける所在は、次の諸事實より大體の位置を推定し、試掘溝數本を適當に掘つて發見するを得たのである。即ち、(一)當地丘陵上に、而も其の丘陵上に開鑿せられた道路に沿つて多數の堅穴が其の斷面を露出せる事實、(二)第一〇二號第一〇三號間・第一〇三號第一〇五號間・第一〇六號第一〇七號間第一〇八號第一〇九號間の各距離が皆殆ど同じく約二十米を示し、而も第一〇三號第一〇五號間には第一〇四號堅穴が、又第一〇八號第一〇九號間には第一〇九號堅穴が各々存在せる事實、(三)第一〇二號第一〇三號間の道路兩側には堅穴斷面の露出なく、而も堅穴の直徑は平均四米餘で、道路の幅員は約五米なる事實、(四)道路南側は道路より約五米の所から急斜面となり、而も斜面と道路間の黒土層は平均してローム層まで除去せられて居るにも拘らず、附近に堅穴の上斷面なき事實、等の諸事實より、若し(三)の事實が丁度道路開鑿で完全なる一堅穴の消失を示すのでなければ、かならずや第一〇二號第一〇三號間の道路東側に堅穴の存在せざるべからざる事を推知し、附近に茶の木の植込み並びに舊道路等あり多少の難點もあつたが、先づ試掘溝を掘る事となつた。

九日早朝より前記第一〇二號第一〇三號間の道路東側に、道路より約四米の所へ道路に平行して幅約五十糎・深さ六十糎の試掘溝(第一トレンチ)を人夫に掘らしむるや、はたして豫期通り、

第一トレンチの北半は深さ五十糎でローム層に達するに、南半は尙黒土層で、即ち其の境界線が堅穴西北部周邊の一部なる事判明し、而も其の黒土層表下三十五糎附近には底部を缺くが殆ど完全な壺形土器（第三七一號）等を出し、尋で第一トレンチを南進せしめるや遂に堅穴西南部周邊の一部も判明するに至り、本堅穴の存在は最早や確實となつた。午後は雨天で發掘を休止する。翌十日午前は、先づ黒土除去作業の都合上、附近の茶の木を除去する。午後は雨天で發掘休止。

十一日には本堅穴の東方周邊部の所在を見極めんと、第一トレンチより東方へ向け、第二・第三・第四の三本のトレンチを深さ約七十糎・各トレンチの間隔約半米で同時に平行して掘らしめた所、夕刻に至り三本のトレンチは各々相前後して東部周邊部のローム層壁に達した。

十二日には堅穴西方周邊部を明白にするため、十日に既に第一トレンチ南端に現れた西南部周邊より、堅穴周邊に沿つて發掘を進め漸次西方周邊を露出させ、又一方では北部周邊の所在を知るべく、第五トレンチを第四トレンチに直角に、即ち第一トレンチに平行し間隔約半米で平行して北進せしめ、遂に夕刻各々其の目的を達する。其の間、第二トレンチの南部の黒土を深さ六十糎まで除去し、同時に南方周邊を明かにする事を得る。而して黒土層表下平均三十五糎附近よりは土器片（第四三九號より第五七三號まで、及び第五九六號より第六三〇號まで）を多數出土する。

十三日は雨天で發掘は休止。

十四日は終日、堅穴内の黒土を深さ七十糎まで掘り下げる。十五日は午前六時より發掘を續行する。黒土運搬作業の便に、第二第三トレンチ間の黒土のみを傾斜面に残し、其れ以外の堅穴内東半分を殆ど床まで掘り下げて、この日の發掘を終へる。尙、この日の發掘で、堅穴中央より稍、北に、爐趾第一號が在る事所謂燒土の露出によつて明かとなつたが、堅穴上部を南北に貫通した茶の木植込みの根が意外に深く、第一號爐趾と本堅穴の床部をなすローム層とを南北一線に切り込んで多少原形を破壊して居る事は残念であつた。

十六日は晴天であつたが御盆で人夫休業の爲、發掘も亦休止する。

十七日は午前七時半より堅穴内に残つた黒土を全部除去するに全力を盡したが、床部に接近するに従ひ土器の出土も多數となり、發掘作業は遅々たるを免れなかつた。然し午後に至り遂に本堅穴にふさはしい大柱穴四個所（第一號—最大徑一米二十糎、第二號—最大徑一米、第三號—最大徑九十糎、第四號—最大徑一米、深サ各々約一米半）相尋で現れ、やがて小柱穴三個所（第五號—徑十五糎・深サ七十五糎、第六號—徑十糎・深サ四十糎、第七號—徑十五糎・深サ四十糎）並びに穴（第八號）も現れ、午後三時には第四號柱穴内に半磨製石斧一個現れ、午後五時半本堅穴の發掘を終了し、同時に今回の發掘をも終了したわけである。本堅穴は最大徑南北九米三十糎・東西八米の楕圓に近い隅なし方形住居趾で、出土土器片は七百二十九個（第三七一號より第一〇九九號まで）を算した。

## 結 語

斯くて第一一號堅穴の發掘を最後に、七月三日より同十七日までの炎天下の堅穴七基の發掘を無事終了したのであるが幸ひにも從來我が國で未だ發見せられたことのない程大規模な第一一號堅穴を發見したことは、悦ぶべきことであり、その上發掘された七基の堅穴の中第一〇一號及び第一〇六號を除く五基の堅穴及び其の附近は、適当な方法をもつて永久に保存される事と内定したことも特筆すべき事柄である。又、第一一號堅穴は帝室博物館囑託巽一太氏により石膏模型とされ、日吉臺出土の土器石器の一部と共に小泉遊長が今夏ハーバード大學創立三百年祭に携行寄贈し、八月六日には日米學生會議に参加した兩國學生代表男女二百名餘も態々遺蹟の見學を行ふ等今回の發掘が各方面に大きな興味と貢獻とを與へる事になつたのは甚だ愉快な事である(西岡秀雄)(昭和十一年八月八日稿)。